

暗い女の極み  
—日本昔話の「蛇女房」におけるおぞましき女性像をめぐって—

本発表は、「蛇女房」という日本の昔話をフェミニズム批評の観点から考察する。世界的に見られる昔話のモチーフのひとつとして、人間と動物が結婚する話、いわゆる動物婚姻譚がある。日本にも動物婚姻譚が多く伝承され、「鶴女房」（あるいは「鶴の恩返し」）はその代表であろう。本発表が扱う「蛇女房」は「鶴女房」と類似点が多く、大蛇が人間の女性に化けて人間の男性と結婚し出産するが、動物の姿を夫に覗かれるため、蛇は子どもを置いて自分の世界に去っていくというのが全体的な流れである。

日本昔話研究で著名な小澤俊夫や臨床心理学者の河合隼雄は、異類女房が人間の世界から悲しく去ってしまう姿を日本昔話の「美しさ」と称賛し、そこに「日本らしさ」をも見出している。そのような見解に対し、本発表は佐々木喜善の『聴耳草子』や関敬吾の『日本昔話大成』に収録されている「蛇女房」の異伝をいくつか紹介した後、フロイトの「不気味なもの」論やジュリア・クリステヴァのアブジェクション論を用いて、異類女房の「消滅」を男性による女性への「欲望」や「支配欲」として読み直し、批判する。最後に、蛇女房を『古事記』に登場する豊玉姫命や他の異類女房と比較し、日本の口頭伝承に現れる美しくかつおぞましい女性の真相を探検していく。